

議論を「見える化」する技法を身につけるための取り組み —ディスカッションの進行を促進させるために—

山中 道代 黒田 寿美恵 宮本 奈美子
吉田 なよ子 土路生 明美 笠置 恵子

県立広島大学保健福祉学部看護学科

抄 録

近年の学士課程教育においては質の高い教育を実現することが求められている。そのため看護学科では、平成22年度より学生の学びを引き出す様々な技法を身につけることに取り組んできた。本稿では、話し合いの内容を『見える化』するために、ファシリテーション・グラフィックと呼ばれる技法を身につけることに取り組んだ平成26年度のFD活動について報告する。

キーワード：ファシリテーション・グラフィック，議論の可視化，学士課程教育

1 はじめに

我が国の高等教育はユニバーサル段階に移行し、量的な拡大を積極的に受け止めつつ、質の維持・向上に努めなければならないという局面に直面している。その結果、大学教員には学士課程教育で質の高い教育を実現することが求められ、適切な教育指導を行うために教授法に関する不断の研究を行うことが強く要請されている¹⁾。さらに、大学生の学習時間が小学生より短いなどの、教育を受ける側に存在する問題への対応も必要となるなど、大学教員に求められる能力も多様化している。

このような社会背景の中、本学においては、「県大型アクティブ・ラーニングの導入による教育改革」が平成26年度の「大学教育再生加速プログラム」に採択され²⁾、学士課程教育の改革が始まった。

看護学科では、グループワークの中で「意見が出てこない」「議論がかみ合わない」などの意見がしばしば挙がっていたことから、多くの教員が教育改革の必要性を感じていた。そこで、学生の知的好奇心を刺激し学習意欲を高めるために、アクティブ・ラーニングの1つであるシミュレーション教育の導入、およびファシリテーションやデブリーフィング技術などの学びを引き出す技術の習得を目指し改革に取り組むこととした。

看護学科のこれらの活動は、平成22年度のテーマ「模擬患者参加型看護教育の見直しと再構築」からFD活動として開始され、平成23年度「教員のファシリテーション能力強化のための取り組み」、平成24年度「学生の学びを引き出す技法を身につけるための取り組み」、平成25年度「シミュレーション教育の技法を活用する実践力を身につける取り組み」へと繋がっていった。

この一連の取り組みにより、ファシリテーションについての知識と技術を習得し、グループワークや実習時のカンファレンスの活性化に資する能力を身につけた。これによって、グループワークなどで多くの意見を引き出すことに成功したが、その一方で、学生から引き出した意見を活かすために必要な、多様な意見のなかから「同じものを束ねる(ブロック化)」「順番に並べる(体系化)」「組み合わせる」などの構造化のスキル³⁾の必要性が高まることとなった。構造化は、頭の中だけで行うことは不可能であり、発言内容を黒板に「描く」ことが求められた。ここから、平成26年度の「議論を『見える化』する技法を身につけるための取り組みーディスカッションの進行を促進させるためにー」という活動へ繋がっていった。

2 平成26年度のFD活動「議論を『見える化』する技法を身につけるための取り組み」

平成26年度の取り組みである「議論を『見える化』する」とは、議論のプロセスや内容を表現(可視化)し、ばらばらの発言を「描いて見せる」ことである。これにより、議論の場を言葉が飛び交うだけでなく、プロセスの共有と対等な参加がなされる場へと変化させる効果がある。これをより効果的に行うための技術が「ファシリテーション・グラフィック」で、話し合いの中で出た膨大な数の意見の中から同じものをまとめたり、順番に並べるといった議論の構造化を助けるものである。また、堀は自身の著書のまえがきに、「議論を『見える』ようにすることは、協働意識を高め、話し合いの質を高め、そして話し合いの成果と参加者の納得感を高めることにつながる」とも述べている⁴⁾。これらの効果は、グループワークの中で私たちが期待している成果と一致することから、ファシリテーション・グラフィックの技術を身につけることは、教育効果を上げることになると考えた。さらに、可視化の技術は講義における板書を効果的に行うことに応用できると考えている。講義内容や学生が自由に発言する内容を、プロセスが共有できる形で表現することは、納得感を高めることにつながる。このような様々な効果を期待して、ファシリテーション・グラフィックを身につけることに取り組むこととした。

本取り組みの目的は、(1)ファシリテーション・グラフィックの基本を学ぶ、(2)議論の内容を可視化する力を実践的に身につけることで、本事業に参加した教員が、講義・演習・実習におけるディスカッションの場で、議論の内容を可視化できるようになる、とした。

3 学習会としての抄読会と模擬会議の開催

3.1 抄読会

ファシリテーション・グラフィックについては、基本的な知識を書物によって身につけることとし、研修会のための基礎知識獲得の場とすることを目的として抄読会を開催した。抄読会は、参考図書「ファシリテーション・グラフィックー議論を『見える化』する技法ー」を使用し、他キャンパスからの参加が可能となるよう夏休み期間である平成26年8月5日に実施した。参加者は20名(看護学科:18名, 作業療法学科:1名, 生命科学科:1名)であった。

ファシリテーション・グラフィックの上達のためには、1. 道具を使いこなす、2. 描き方に工夫をこらす、3. 要約力を身につける、4. ポイント同士の関係を描く、5. 図解ツールを駆使する、6. レイアウトを極め

るといった6つのポイントが挙げられている⁴⁾。抄読会では、参考図書を用い、この6つについて各々の考えや疑問点を発言することで、参加者の理解を深めることに努めた。

3.2 模擬会議

模擬会議は、抄読会で得た知識を活用しファシリテーション・グラフィックを体験することを目的に企画した。抄読会で基本的な知識を理解した後の平成26年8月29日に、参加者16名（看護学科13名，作業療法学科2名，生命科学科：1名）を2つのグループに分け実施した。提示されたテーマについて議論し、その内容をファシリテーション・グラフィックの技術を活用しプロセスを可視化することを試みた（図1）。

模擬会議のテーマには、可視化のために活用するフォーマット（レイアウトの基本パターン）が異なる2種類を選んだ。参加者は、初めての経験に戸惑いつつも、工夫をこらしながら可視化に努めていた。特にチャート型を使うことが適切となるテーマでは、慣れないフォーマットであったためか、活用に苦労している様子が見えられた。チャート型は議論の内容が分かりやすく表現できるという利点がある一方、活用に当たっては適切なパターンを選ぶ必要があるなど注意すべき点があることから、使いこなすには経験が不足していたと考えられる（図2）。

模擬会議終了後の感想では、「まとめるのが難しい」などの感想があった。これは、1回目の抄読会と2回目の模擬会議までの間が3週間空いたことや、抄読会で得た知識の定着が十分ではなかったことが要因であると推測される。一方で、「なかなか楽しい」のように、可視化して議論を進めることの効果を感じる参加者もあった。模擬会議を行うことにより、基本的な知識を身につけると共に、ファシリテーション・グラフィックグラフィックがどのようなものか知るきっかけには



図1 抄読会で学んだことを模擬会議で実践している様子。板書しながら議論を進めることに難しさを感じることもあった。

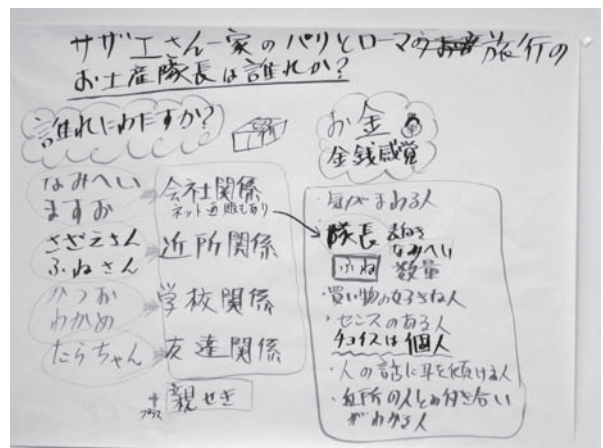
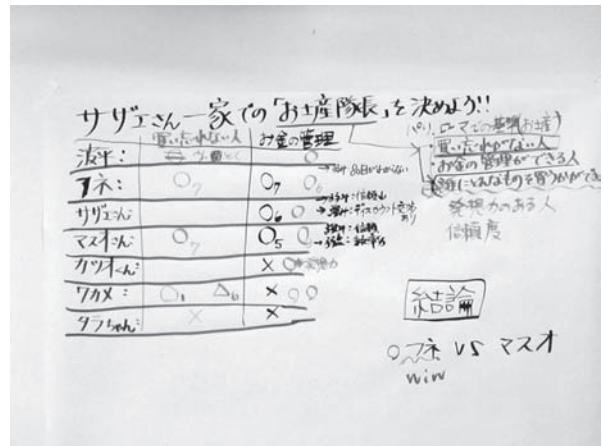


図2 チャート型による可視化が効果的なテーマの板書例。適切なパターンが選べればファシリテーション・グラフィックの技術が未熟でも十分な効果が得られる。

なったと考えている。

4 研修会の開催

4.1 研修会の内容

日本ファシリテーション協会フェローでもある加留部貴行先生（九州大学大学院総合新領域学府客員准教授）を招き、平成26年12月24日にファシリテーション・グラフィックの研修会を開催した（図3）。参加者は16名（看護学科：13名，人間福祉学科：1名，生命科学科：1名，総合教育センター：1名）であった。

研修会は、可視化することの効果を経験することを目的に企画し、講師には、事前の学習会に参加していれば理解が深まり、参加していなくても概要が理解できるような内容となるよう依頼した。実際には、基本的な知識の講義と演習が織り交ぜて行われた。演習は、「音読されている内容を聴く」「対話を聴く」「発言内容を聴く」などの「聴く」ことの難しさを感じながら、可視化することを体験することができる内容となっていた。



図3 研修会の様子。講義と演習が絶妙なタイミングで組み立てられ、飽きさせない内容であった。

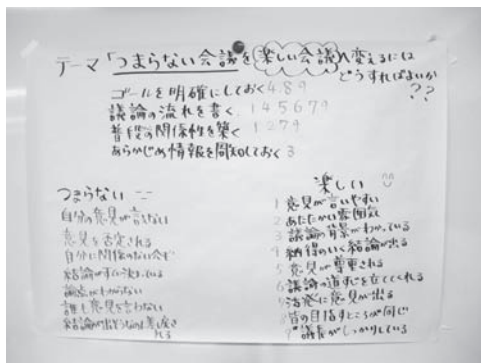
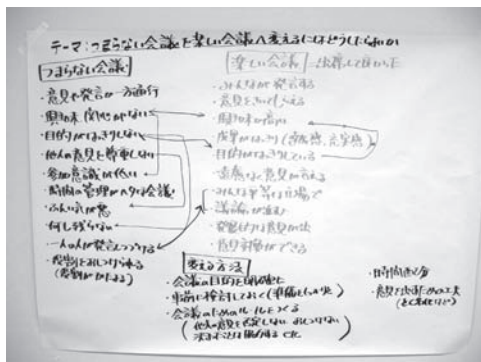
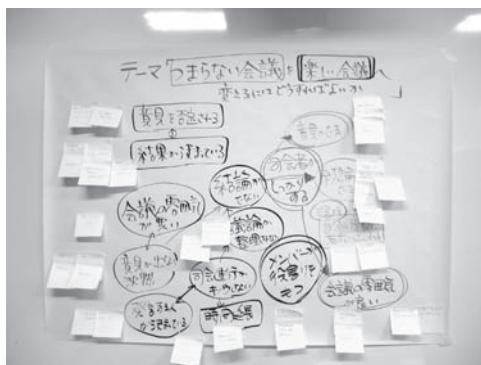


図4 研修会で行った議論を可視化した成果物。同じテーマが提示されていたが、まとめ方はそれぞれであることが分かる。可視化の技術により、プロセスの共有化の程度に差が生じる。

議論を可視化するには、発言の内容を短く要約したり、キーワードを並べたりして、発言の原意を損なわないよう要領よくまとめる力が必要となる³⁾とされている。この研修会で、可視化するために「よく聴き」「要約」し「まとめる」力が必要であることを体験の中で理解することができた。

可視化の成果である図4には、同じテーマで話し合った内容でも、どのようなフォーマットを選択するかによって表現が異なり、プロセスの理解に変化が生じることが現れている。この違いを理解する点においては、事前に行った抄読会や模擬会議での経験が活かされていた。

4.2 研修会の評価

研修会の参加者は、教育経験が10年未満の比較的若手が多かった。実施後のアンケートでは、満足度は非常に高かった(表1)。ファシリテーション・グラフィックの技術が教育活動に活かせるとの回答が多かったが、自由記述を見ると自身の「要約する力」の必要性を感じたり、聴く姿勢について考える機会となるなど、各自の課題を意識することができる研修会となっていた(表2)。今回の研修会は、教育経験が15年未満の今後の教育を担う若手教員の参加が多かつ

表1 研修会終了後のアンケート調査結果 (n=15:人)

参加者の教育経験年数	
5年未満	3
5年以上10年未満	6
10年以上15年未満	4
15年以上20年未満	2
20年以上	0
研修会は期待通りであったか	
期待通りだった	11
まあまあ期待通りだった	4
少し期待はずれだった	0
期待はずれだった	0
研修会は満足いくものであったか	
満足した	11
まあ満足した	4
あまり満足しなかった	0
不満足だった	0
今後の教育活動に活用できると思うか	
思う	11
少し思う	3
あまり思わない	0
思わない	0
無回答	1

表2 研修会を今後の教育活動に活用できるかについての自由記述内容

-
- ・意見を整理する場面で活用したいと思うが、まずは自分の要約する力をつける必要性を感じた
 - ・学生を考えさせる授業のためには、教員自身が時間軸で物を考えていく姿勢を心掛けることをしたい
 - ・座長（議長）としてのすすめ方（今回の研修でもやはり議長のセンス、すすめ方も大切だと思った）
 - ・何となく使っていた手法を自信と根拠を持って使えるようになる
 - ・会議，学生のグループワーク・カンファレンスで活用できそう
 - ・授業のグループワークで，議論を付せんを使って整理させるなど
 - ・会議でも取り入れられるとよいと思う
 - ・具体的な方策も授業で活用したい
 - ・どのような場面においても活用できると思う
 - ・本学は教室にマーカーを整備するところからスタートしないといけないと思った（インク切れのものばかりということがある）
-

た（15名中12名）。この年代は，様々な教育技法を学び，自らの教育に取り入れることが求められる年代であり，教育への意欲を高めることは重要である。その点において今回の研修会は，研修への満足感が高く，今後に活かされるとほとんどの参加者が評価したことから，意欲向上に繋がったと考えられる。

5 期待される効果

- 1) 「可視化」の技術を用いて発言内容を要約し，整理・統合することができれば，参加者相互の理解を深めることができる。これは，グループワークやカンファレンスの場における学習効果を高めることでもある。
- 2) 教員が議論の内容を可視化する技術を実践することは，学生にとっての実践モデルとなる。教員が手本を示すことで，議論の中でリーダーシップが取れる人材育成につながる。

6 今後の課題

ファシリテーション・グラフィックは，訓練すれば誰でも身につけられる技術とされている。しかし，別の言い方をすると，身につけるためには訓練が必要ということで，今回の研修会に参加しただけでは，効果

的に活用できないということでもある。今後は，教員一人一人が意識してこの技術を活用し，高める姿勢を持ち続けることが重要である。

今後，グループワークなどで活発に出される学生からの意見を「よく聴き」「要約」し「まとめて」可視化する際は，今回のFD活動で得たことを実践し，自身の教育力向上に努めたい。

引用文献

- 1) 中央教育審議会大学分科会：学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）. 文部科学省，（オンライン），入手先< http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/080410.htm > (2015.7.31 参照)
- 2) 県立広島大学：平成26年度文部科学省選定「大学教育再生加速プログラム」，県立広島大学，（オンライン），入手先< <http://www.pu-hiroshima.ac.jp/site/ap/> > (2015.8.31 参照)
- 3) 堀公俊：ファシリテーション入門. 東京，日本経済新聞出版社，123-158，2004
- 4) 堀公俊，加藤彰：ファシリテーション・グラフィック 議論を「見える化」する技法. 東京，日本経済新聞出版社，1，2006

The effort to acquire a technique which visualizes discussion

— To promote the progress of a discussion —

Michiyo YAMANAKA Sumie KURODA Namiko MIYAMOTO
Nayoko YOSHIDA Akemi TOROBU Keiko KASAGI

Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

Abstract

Recently, it is required to implement high-quality education in the undergraduate university faculty. We have been working on acquiring a variety of techniques that will help students learn since 2010. In this paper, we report on FD (faculty development) activities in 2014 that worked on acquiring a technique called facilitation graphics in order to “visualize” the contents of a discussion.

Key words: facilitation graphics, visualize discussion, undergraduate education